

- ⑤ 「積極的に授業に取り組んでいる」と考える生徒の割合
 (5月) ⇒ (目標) ⇒ (2月)
 97.7% 97.9% 93.5%
- 「積極的(主体的)授業に取り組んでいる」と考える生徒の割合
 (9月) ⇒ (1月)
 88.2% 89.0%
- ⑥ 「計画的に家庭学習にとりくんでいる」と考える生徒の割合
 (5月) ⇒ (目標) ⇒ (10月) ⇒ (12月) ⇒ (2月)
 73.9% 75% 76.4% 71.7% 71.2%

結果の考察

- ① 県調査の各教科の平均正答率で、同一生徒による学校の正答率の対県比については、教科によってはあまりよくない結果の教科もあった。これを受けて各教科において、3学期中、春休み、次年度に向けての指導計画を立て、指導改善に取り組むこととする。また、「短期」的に改善が必要な「知識・技能」については、3学期の授業内に復習させる。併せて、各学年の学習内容を総復習するための問題集を使用し、演習問題に取り組ませることによって基礎・基本の知識の定着を図る。「思考力・判断力・表現力等」の向上については、「長期」的な手立てを設定し、新年度に授業実践を行う。また、各教科における「基礎・基本」の指導についてまとめ教科内で共有し、次年度の指導に生かす。
- 因みに「県調査の各教科の平均正答率で、同一生徒による学校の正答率の対県比」に関する資料として、1年生の学習状況調査の変化表を載せる。

| 対県比 | 国語 | 社会 | 数学 | 理科 | 英語 |
|-------|------|------|------|------|------|
| R2 小6 | 0.85 | 0.86 | 0.82 | 0.90 | |
| R3 中1 | 0.98 | 0.92 | 1.07 | 1.15 | 0.95 |

- ② 「小中連携」についての教師アンケート結果は、以下の通りであった。
【現在、小中連携はどの程度できていると感じていますか】

| | 6月 | 2月 |
|-----------|-------|-----|
| よくできている | 0% | 0% |
| ほぼできている | 0% | 25% |
| あまりできていない | 71.4% | 75% |
| 全くできていない | 28.6% | 0% |

本年度は、「月1散歩」と称する小中相互授業参観が話題になり、お互いの授業を参観する機会を作った。また、小中合同研修会を実施し、講演会や専門部会を実施した。このことにより、小中連携の場面が段々と可視化してきている。しかしながら、「あまりできていない」と回答している教師が75%であることは事実である。その要因は、本年度、小学校が算数に特化した研究と授業公開を行っており、中学校の数学科以外の教科では授業における連携を行っていないためであると思われる。

今後は、小学校での学習指導方法を、教科を越えて中学校で少しでも生かすことをより具体的にできるようになることが課題である。また、学習環境づくりや家庭学習の習慣付けについて、小学校と中学校の情報交換が、これまでも増して気軽にできるようになるべく、研究を継続していきたい。

- ③ 教師アンケートから「授業改善リーフレット(授業づくりのステップ1・2・

3) を活用して授業づくりや授業の振り返り、指導案作成などを行っている」と考える教員の割合が増加した。特に、「振り返り」の場面において、以下の変容となった。このことから、生徒が自分自身の言葉で、明確な視点をもって振り返りを行う場面を設定する教員の割合が増加したと考える。

【各ステップに取り組んだ教員の割合】

| | ステップ1 | ステップ2 | ステップ3 |
|----|-------|-------|-------|
| 5月 | 55% | 40% | 5% |
| 2月 | 36% | 44% | 20% |

また、生徒アンケートからは、95%以上の生徒が、『めあて・まとめ・振り返り』の場面を設定している」と回答していることから、教師も生徒も「めあて・まとめ・振り返り」を意識しながら学習活動が進んでいると考える。

- ④ 生徒会と連携し、タブレット端末による復習教材である「ドリルパーク」を活用して「月1満点テスト」を9月～1月に計5回実施した。生徒会学習部が問題作成・採点・結果(満点者数の多いクラス)の発表を行った。月行事の関係で、十分に学習時間を確保できないときもあったが、回を重ねる毎に主体的に学習に取り組む生徒が増加した。

85%程度の生徒が「基礎学力が向上した」と肯定的に回答していることから、本活動を継続することにより、基礎学力の向上がのぞめるのではないかと考える。

- ⑤ 「積極的に授業に取り組んでいる」と肯定的に回答した生徒は、年間を通して高い割合であった。また2月のアンケートで「いいえ」と否定的に回答した生徒は0%であった。生徒たちは「授業中、ノートの取り方を工夫している」「先生の話を中心して聞いている」と回答した生徒たちが最も多い。授業を聞いて、自分なりにまとめながら授業を受けている様子が見える。2月のアンケートにおいて数値的な高まりがみられなかった原因は、5月調査時の「積極的に取り組む」ことについての受け止め方と、3学期調査時のそれに違いがあるのではないかと考える。

生徒会学習部が実施したアンケート(6月)によると、「進んで発表したり発言したりする」ことに肯定的に回答した生徒は、全校で50%未満であった。「いいえ」と答えた生徒の理由では「勇気がないから」が最も多いものの、「どう答えてよいかわからない」も多かった。「いいえ」と答える生徒が勇気を出して発表・発言を行うには、生徒の習熟度を見極めた教師の発問が大切となる。理解を問う発問と思考・表現を要する発問を組み合わせた授業運営の必要性が感じられる。

「積極的(主体的)授業に取り組んでいる」と考える生徒の割合は、約89%いることがわかる。また、教師の授業づくりに対する姿勢と研究授業の積み重ねにより、生徒たちが授業に取り組む姿勢も、向上しつつあるのではないかと考える。今後は、何をもって「主体的」とするのかを教員と生徒が共通理解し、共に授業に臨む姿勢をもつことによって、さらなる向上を期待できるのではないかと推測される。

- ⑥ 計画的に家庭学習に取り組んでいる生徒の割合は、10月(76.4%)よりも3学期(71%)のほうが減少している。

1 1月の定期テストに向け、フォーサイト手帳の一部を利用し、「夢をかなえる計画表」(テスト勉強計画・記録表)を全校生徒で取り組んだ。初めての形式で取り組んだこともあり、計画や記録がうまくいかなかった生徒もいた。実施後のアンケートにより、テスト勉強に対する実態が明らかになった。

【「夢をかなえる計画表」と「学年末テスト」への取り組みについて】

| | 1年生 | 2年生 | 3年生 |
|-------------------------|-------|-------|--------|
| 総学習時間数のうち最も多いもの(時間) | 0~7h | 8~23h | 24~30h |
| 勉強時間の目標を達成できた生徒 | 32.0% | 48.0% | 55.3% |
| 計画を立て、実行することができた生徒 | 38.3% | 47.2% | 57.4% |
| 生活習慣を把握し、安定した生活を送っている生徒 | 52.8% | 61.5% | 48.9% |

このことにより、以下のことが分かった。

- ・「3年>2年>1年」の順に、「学習時間の確保、自分で立てた目標の達成、計画を立てて実行すること」ができています。
- ・「起床時間・就寝時間・勉強時間」の記入と自己把握については、2年生が最も安定しているといえる。

また、『「夢をかなえる計画表」を通して意識が高まった』項目として、本校が目指す学習マネジメント力のうち「プランニング力・タイムマネジメント力・ルーティン力・振り返る力」について回答を得たが、どの学年も『「プランニング力・タイムマネジメント力」が向上した』という生徒が過半数を占めており、学年による差はあまり見られなかった。

12月~2月、希望者37名に「フォーサイト手帳」を配布し、利用してもらい、本校が目指す「学習マネジメント力」という観点でアンケートを実施し31名から回答を得た。本校が目指す学習マネジメント力のうち、向上したのとして『「タイムマネジメント力・振り返る力」が向上した』が最も多かった。感想として、「自分の成長が分かった」「時間を大事にできた」「生活を見直すことができた」「生活リズムが分かった」という声が寄せられた。

以上のことより、家庭学習時間の確保と、目標達成のための「やりぬく力」を育てることは、本校の生徒たちにとって有益なことであり、取り組みの継続が必要であると思われる。

令和4年度は、本校が目指す学習マネジメント力を身に付けることの一助として、全校生徒で「フォーサイト手帳」の使用に取り組む。年間を通して取り組むことにより、計画的に生活や学習に取り組む生徒の育成を目指したい。

今回「フォーサイト手帳」使用を希望した生徒たちには、記入に関する指示を出さず、自由に使用してもらった。その結果、約25%の生徒が「最初は記入していたが、今は記入していない」と回答した。このことから、高い効果を得るためには、年度当初のオリエンテーションに加えて、学期ごと、試験ごとに、振り返ったり確認したりといった活動が必要になってくると考えられる。

4 事業期間

令和3年4月 ~ 令和4年3月

5 実施実績

(1) 協議・検討のための会議等の設置

| 主な構成等 | 人数等 | 開催回数 |
|---|----------------|-------------|
| ○ 学力向上に係る小中連携推進委員会 (管理職、教務主任、研究主任、学力向上対策コーディネーター) | 8名 | 7回 |
| ○ 小中合同研修会 (8月、9月、1月) | 小中全職員 | 3回 |
| ○ 小中合同研究部会 | 小中全職員 | 3回 |
| ○ 校内研究推進委員会 管理職、教務主任、研究主任、学力向上対策コーディネーター、 各学年代表(主任等)、学力向上推進教員 | 7名 | 13回 |
| ○ 校内研究会 (専門部会の実施を含むもの: 5月、6月、8月、9月、12月) | 全職員 | 13回 (5回) |
| ○ 授業研究会 | | |
| ・ 地域公開授業(9月) | 小中全職員 他校職員 | 1回 |
| ・ 小学校からの全員参観 | 小職員 | 1回 |
| ・ 授業チームによる授業公開(10月、11月、12月) | 授業チーム 及び小職員 | 7回 |
| ・ 小学校への授業参観(9月~11月) | 管理職・ 数学科等 | 6回 |

(2) 実施した調査・研究活動

| | |
|--|--|
| ○ 諸調査について、校種や教科の枠をこえての分析 | |
| ・ 校種の枠を越えた諸調査分析は、全国学力・学習状況調査を基に行い、「小中連携通信」にも掲載した。 | |
| ・ 教科の枠を越えた分析は実施できなかった。 | |
| ・ 異教科間で授業チームを組んで研究授業を行うことによって、教科の枠を越えて、授業づくりのアイデアを交換し、指導に生かすことに取り組んだ。 | |
| ○ 各教科における、「指導目標」「手立て」「評価」の関連付けと整理 | |
| ・ 「授業づくりのステップ1・2・3」を活用し「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の場面を授業に位置付けた。「単元計画・評価表」「振り返りシート」等を作成し、学習履歴を生徒自身の言葉で記述した教科もあった。 | |
| ○ 研究授業 | |
| ・ 9月 29日 数学科(1年A組) 渕上誠教諭 川口功教諭(地域公開授業) | |
| ・ 10月13日 保健体育科(1年B組) 牟田有一郎教諭 (チーム研究授業) | |
| ・ 10月15日 家庭科(1年B組) 原志津子教諭 (チーム研究授業) | |
| ・ 10月29日 美術科(1年A組) 大野祐里教諭 (チーム研究授業) | |
| ・ 11月10日 国語科(1年B組) 松下三咲教諭 (チーム研究授業) | |
| ・ 12月 3日 英語科(1年B組) 吉田喜美子教諭 (チーム研究授業) | |
| ・ 12月 9日 社会科(3年B組) 小淵重樹指導教諭 (チーム研究授業) | |
| ・ 12月13日 理科(2年A組) 川添真維教諭 (チーム研究授業) | |
| ・ 1月 12日 英語科(1年B組) 吉田喜美子教諭(小中合同研修・提案授業) | |
| ※ 本校における授業公開には、小学校からも毎回参観された。 | |

- 生徒の実態調査
 - ・ Microsoft Forms を利用したアンケートおよび集計
- 先進校視察及びその研修会
 - ・ 京都市立下京中学校研究発表会への参加及び報告

(3) その他、当事業において実施した事項

- ・ 小中連携通信の発行 3回発行
- ・ 教師対象の学力向上についての講演会の開催
 - 6月 9日 小中合同研修会 小松原知子指導教諭（東部教育事務所）
「小中連携による学力向上について」
 - 8月 4日 小中合同研修会 山崎正隆指導主事（吉野ヶ里町教育委員会）
「小中連携による学力向上の組織の在り方」
 - 1月 12日 小中合同研修会 田中博之教授（早稲田大学教職大学院-）を招聘
「小中連携による学力向上の在り方」
- ・ 「数学科」の指導助言
 - 9月 29日 公開授業 八島重綱指導主事（東部教育事務所） 指導助言

6 成果と課題

(1) 成果

ア 「学習マネジメント力」や「基礎・基本」の向上のために

- ・ 全職員が専門部会に分かれて本校の課題に取り組んだことにより、学力向上のために必要な要素である「基礎・基本」及び「学習マネジメント力」が段々と明らかになってきた。
- ・ 全校生徒に対して、11月の定期テストに向けた「夢をかなえる計画表」（学習計画・実行表）の導入を行った。講話の中では、「小・中学校の家庭学習アイデアブック」（田中博之著）を参考に、本校が目指す「学習マネジメント力」について、生徒たちに示すことができた。
- ・ 各教科における基礎・基本の確実な習得についてのアイデアを集め、一覧表にして職員間で共有することができた。このことにより、教科を越えた指導方法の共有に一步近づくことができてきた。具体的には、帯学習やパフォーマンス課題を通して基礎・基本の定着を図っている教科がほとんどであった。
- ・ ICT の利活用で視覚や聴覚を刺激することにより、生徒の興味・関心を高め、学習に対するモチベーションを高める効果をねらっている教科もある。また、本年度、「ドリルパーク」を活用し、教材の反復ドリルを行う場面を設定した。このことにより「実践事例でわかる！タブレット活用授業」（田中博之著）にも述べられているように、1人1台端末で「反復ドリル教材の進度や学習量を自己決定」できるようになった。その結果、子供たちの多様性に対応することができ、意欲が高まった生徒が出てきた。また、「1人1台端末活用パーフェクト Q&A」（佐藤和紀他著）、「タブレットでふれあうエンカウンター」（大友秀人他著）を各学年に1冊ずつ配置し、端末を活用した授業へのハードルを下げるとともに、教師のスキルを向上することに資することができた。

イ 授業改善について

- ・ 全教員が4つの授業チームに分かれ、異教科間で指導方法の工夫を共有することができた。このことが、授業改善の視点を多方面からもつことにつながり、授業が深化したり広がったりして、これまでよりも発展した授業展開を図ることができた。
- ・ 「授業づくりのステップ1・2・3」を活用した、「めあて」の提示や、生徒の言葉による「まとめ」と「ふりかえり」に取り組ませることについて、高い割合で設定することができた。この

ことにより、生徒の授業に対する意識も高まり、「めあて」を理解して学習に取り組む生徒たちが出てきていると、推測される。

ウ 小中連携について

- ・ 専門部会の話し合いを持ち、情報を共有することができてきた。中学校における「立腰」や「自学」のマニュアルを小学校でも共有していただいた。特に「自学」については、中学校で取り組んでいる「自学ノートコンクール」の優秀作品を小学校に掲示していただき、6年生の生徒の目に触れる機会を作っていただいている。
- ・ 家庭における教育力が二極化している昨今、生徒自身に自らの生活と学習を改善していく力を身に付けさせることは小・中ともに重要な課題である。「小・中学校の家庭学習アイデアブック」（田中博之著）を参考に「子供たちに小学校の頃から、仲間と支え合いながら自己マネジメント力を育てることで、（～中略～）強い意志と確かなスキルを身に付けさせる」ことを目指している。小学校では、中学校の試験勉強期間に合わせ「家庭学習がんばろう週間」を設定し、家庭学習習慣の育成に取り組まれた。小・中学校が同時期に家庭学習のキャンペーンに取り組むことを通して、家庭教育に対する保護者の意識向上につながるきっかけとなったことに感謝している。
- ・ 小中の相互授業参観の機会をもつことができた。小学校のきめ細かな指導から学ぶものは大きく、中学校でも教科を越えて指導方法を共有し、小中のなめらかな接続を目指したい。

エ 「主体的な学び」について

- ・ 専門部会において「主体的な学び」についての話し合いをもつことができた。今後、「主体的な学び」の定義を明らかにし学習指導に役立てることについての意識が高まった。
- ・ 「主体的に学習に取り組む態度」について職員間で話し合いを重ね、講演会で理解を深めることができた。
- ・ 「学びに向かう力を育む授業事例集」（横浜国立大学教育学部附属横浜中学校編）を参考にし、各教科の身近な物事に関連した課題設定や自己調整学習の視点をもつことができた。

オ 生徒会とのタイアップ

- ・ 生徒会との協働による「月一満点テスト」については、学習に取り組みやすい条件の出題を目指したことにより、一生懸命に取り組む生徒が出てきた。また、「ドリルパーク」のシステム「ポイント制」が、動機づけの面で功を奏したと考えられる。学力向上が不十分な面もあるが、コツコツ取り組む生徒たちの点数に伸びがみられるようになってきた。また、学習部の生徒たちの協力体制が整い、生徒たちが自ら動いて本活動の運営に当たることができた。

(2) 課題

ア 「学習マネジメント力」や「基礎・基本」の向上のために

- ・ 本校が目指す「身に付けてほしい力」についてのオリエンテーションを実施し、生徒と教師が共通理解して学校生活をスタートする必要がある。
- ・ 計画的な家庭学習習慣を身に付ける第一歩として、テスト計画の立案を学活に位置づける必要がある。その際に「フォーサイト手帳」を活用し、立案から実行までを生徒自身が行うことを通して、学習マネジメント力の向上を目指したい。
- ・ 基礎・基本の確実な習得について、「喜んで、面白く、やりたいな」と生徒が思えるものを、教科内で共有し、授業実践する必要がある。
- ・ 「月一満点テスト」と「ドリルパーク」を関連付けた取り組みにより基礎・基本の定着を図るためには、「ドリルパーク」を使用する学習時間と機会確保の必要性を感じる。

イ 授業改善について

- ・ 「授業改善リーフレット（授業づくりのステップ1・2・3）」の活用については80%以上の

教員が肯定的な回答をしているものの、「ステップ2以上」の振り返りについては21%にとどまっている。このことから、理解できたことやできるようになったことを振り返るとともに、自分の成長や不足部分を生徒自身が認知し、次の学習に進むことができる「単元計画表・実行表」を作成し、生徒に示して授業を行うことを検討する必要がある。

- ・ 「思考スキル」のうち「応用・評価・理由付け」であれば、各教科で取り組むことができるのではないかと考えられる。知識を活用しながら基礎力を高める、というイメージをもちながら、学習活動を設定する必要がある。

ウ 小中連携について

- ・ 家庭学習やよりよい生活習慣の確立について、今後も協議を進めていく必要がある。
- ・ 気軽に相互授業参観ができるよう、今後も進めていく必要がある。特に算数以外の教科での相互参観が、中学校にとって大切になる。

エ 「主体的な学び」について

- ・ 生徒と先生がともに「主体的な学び」に向かうために、その定義と具体的な方策を探り、学習に関するオリエンテーションを全校生徒に対して実施する必要がある。
- ・ 本年度は、「教科の『深い学び』を実現するパフォーマンス評価」（西岡加名恵著）を参照し、パフォーマンス課題を通して、基礎・基本の定着を目指した教科が多かった。今後は、パフォーマンス課題を導入した授業の在り方を確認し、主体的に課題に取り組んで、「深い学び」の実現についても模索したい。

オ 生徒会とのタイアップ

- ・ 「月1満点テスト」の実施及びドリルパークの活用は、生徒会とタイアップして継続する必要がある。